



おじゃまします

さかき新企業人インタビュー②④

クリエイターとして完成度を高め めざすは営業できる製品づくり

まえ じま じょう じ
株式会社長野エン・ペー・エム・ファクトリー 代表取締役 前島 丈司さん



昭和38年生れの50歳。上田東高校から都内の大学に進み、卒業後は長野市の食品卸会社で営業マンとして活躍。平成3年、家業の(株)小林製作所(当時)に入社後、社名を変え、創業当初からのプレス加工に加えレーザ技術を駆使した試作品製作等の少数多品種製造を手がけるようになる。商工会では青年部長として各種イベントを実行、現在は親会役員。高校時代にサッカーのインターハイ出場、大学時代はアメフト部で活躍し、40歳まで長野のチームでプレー。現在は地元少年サッカーチーム監督、千曲市サッカー協会副理事長を務め、県外遠征の引率やコーチング等で回る。

御社は創業からすでに半世紀を経ていると聞きました。創業は私の祖父です。祖父は東京生まれで、ゼロ戦をつくっていたそうです。企業疎開で避難したこの坂城にそのまま住み着き、持ち前の技術

大学で経営を学び、県内の大手総合食品卸会社の営業畑から32歳で家業の金属加工の世界に入る。そのとき、社名を現在の長野エン・ペー・エム・ファクトリーに変えた。その意図したところは、「ネクスス・ビーム・マテリアル」の頭文字を取り、レーザ加工という次世代の金属加工に思いを馳せたものだった。同時に、規模を追うのではなく質の高い製品を開発製造する「工房」であるという信念から、最後を「ファクトリー」で結んだ。その強い意思は、現在の会社の原動力ともなっているようだ。

力で昭和34年に金型・プレス加工の会社を立ち上げました。今期で創業55年です。坂城における金属加工の草分け的な存在ではないでしょうか。今でも敷地内に当時の木造工場とプレス機が残っています。祖父の後を父が継ぎ、私が3代目。私は平成3年に家業に入りましたが、それを機にCIIを導入して社名を変えました。時代はバブル経済が崩壊し、それまでの大量生産時代からの転換期。これからは新しい技術であるレーザビームによる精密加工を主軸にしよう、という思いからでした。ファクトリーとしたのは小回りが利く現場で、クリエイティブで感性豊かなモノづくりを目指したかったからです。一方、プレス加工もこれまで同様続けることにしま

したが、結果的に残しておいて良かったですね

レーザ加工は社長を中心に展開されているそうですね。

私が主となって営業から設計・製作まで行っています。試作品や一点モノの受注で、クライアントからポンチ絵(簡単な設計図)をいただき、それをもとに私の感性やデザインセンスで仕上げていきます。目指しているのは営業の出来る製品を作ること。一点一点がオリジナルですから難しくもありますが楽しい仕事です。クライアントの期待以上の製品づくりにこだわっています。おかげさまで口コミや評判を通して受注も堅調に増えています

具体的には?

部品の試作品などに限らず様々です。先日は、山伏が手にする錫杖のヘッド(上部飾り)を依頼されました。寸模様のデザインのご注文でした。この種の受注は決して大きな商売ではありませんが、景気の動向に左右されることが少なく、堅実です。プレス加工もコンスタントに仕事をいただいております。業績は安定しています

今後の展望・目標をお聞かせください。

今、サッカーの交流を通して異業種の方々とのネットワークを広げています。それ

が仕事に結びつくかは分かりませんが、こうしたコミュニケーションを通して自分自身の感性やセンスを磨いたり、様々な情報を交換したり、いずれは自分の糧になるだろうと思います。それは、この坂城町も同じでしょうね。商工会の活動も、点と点のつながりではなく、もっと密接な線と線、それも太い線で結びつくような活動と交流を各自心がけることが大切だと思うのです

御社についてはいかがでしょうか。

刀工の宮入恵さんのように研ぎ澄まされた感性と作り込んでいくその匠の技を尊敬しています。クリエイターとしての私の目標ですね

